

銀河は玄関にとびこんで、げた箱の下をのぞきこみました。下には七つばかり小石がまとめてありました。うずらの卵とにわたりの卵の間ぐらいの大きさの、つるつとした石です。ほこりまみれでした。

「やっばり、あった！」

ほたる石と銀河が名づけた石です。夏に河原でひろった石でした。日にあたってかわいている時は白っぽい石ですが、水にぬれると、青く色が変わるのです。大発見をしたようで、河原をなん往復もして、やっと七つ見つけたのです。ほたる石と名がつくと、それはただの石ではなくなり、銀河が発見した世界に七つだけのほたる石になったのでした。

見つけた時は、家の者にも知らせて、げた箱の上にかざっておいたのです。数日は、学校に行く時など、手の中どころがしたり、重さをみたり、カチカチうちつけてみたりしたのでした。

ところが日がたつと、ほたる石は、ほこりをかぶって、白いころんとした石になり、いつの間にか、げた箱の上から、げた箱の下の暗がりにおいやられたのでした。銀河も、ほたる石のことをすっかり忘れていました。

「なんだ、おまえたち、こんなところにいたのかよ」

と、銀河は、ほたる石にいました。なつかしくなかったり、ほこりまみれのほたる石に、もうしわけなくなったりしま

した。

さて、銀河は二つほたる石を持って、外にとびだしました。そして、てぶくろをとって、ひとつのほたる石を上へのせると、もうひとつを種のようにまん中にうめて、雪玉を作りました。雪にぬれると、ほたる石は、生きかえったように青く光りました。ギョッ、ギョッ、とほたる石に話しかけるようににぎりました。それから、新雪の上をころころころがしました。

ただの雪だるまではない、特別なもの。人間の友だちのようにはいかなくても、話を聞いてくれたり、遊んだりしてくれるもの。ほたる石をいれると、そういうものに近づくような気がしたのでした。ほたる石が雪だるまに命をふきこむわけです。本当に、そんなものができると信じているわけではありませんが、ちょっとしたいたずらをしたうえで、銀河は、ワクワクしました。

「よいしょ、よいしょ。かっこいいおなかにしてやるぞ」
銀河は雪玉に話しかけました。桜堂集落で、たったひとりで遊んでいると、ひとり言をいうくせがついてしまったのでした。

雪玉が大きくなり、キッツ、キッツといいながら、まわりました。

「よいしょ、よいしょ。ちべたいー」

すでどころがしていると、頭の先までキーンとしたつめ